嫦娥は家を出てからどうなったか
── 魯迅「奔月」再読 ──

星野　幸代

筆者は「奔月」[1] の終結部について疑問を抱いている。羿が、嫦娥が出ていったのを知ってすぐには腹をたてなかったにもかかわらず、外に出て月を見た途端なぜ殺気を発するほど腹をたてたのか。また、それほど憤ったのに、なぜあっさりと立ち直ったのか。

90 年代以降だけでも「奔月」批評は、『故事新編』評の中では少なくない。傾向としては二つに分けられるであろう。一つは、魯迅がいかに羿という神話の英雄を人間的に、あるいは権威の失墜した人物として描いているかに焦点を当てた研究である [2]。もう一つは、この小説がかなりの部分で高長虹を風刺しているため、魯迅の私生活と共に考察する研究である [3]。

冒頭に挙げた羿の「怒りの場面」の解釈として、代田智明は次のように述べる。

> 怒りは、男の理屈からすれば理解できないでもない。……日々ただ彼女のために心配し、苦労したその当人による仕打ちなのである。羿にすれば、掌中の珠玉のごとく大事にしていた片方に裏切られ、もう一つの珠玉をさらわれたことになるからだ。

林非は次のように分析している。

> 羿は自分は昇天してしまってもよい状況にありながら、全く文句を言わずに嫦娥のために奔走した。彼女への愛情は誠実で、自己犠牲の精神に満ちている。だが彼の愛は盲目的であり、利己的で凡庸な嫦娥に理解されなかった。魯迅は羿の形象を塑像するにおいて、彼の性格の複雑さをリアリスティックに展開し

ている。……魯迅が彼が決してどこまでも思いやり深いのではなく、腹が煮えくり返るほどの怒りの火を燃やすさまを描いているからこそ、羿の性格は豊かで信用できるのだ。さらに彼の性格の複雑さが現れているゆえに、読者に永遠に次のような懸念を残す。もしも彼が本当に嫦娥に追いついたら、怒って矢で彼女を射殺すだろうか、それとも以前の通り彼女を大事にするだろうか。（pp.234-235）

両者の主張に共通するのは、自己犠牲的に尽くしてきた男が、当の女によって裏切られたのであるから、殺意を発するほどの怒りは当然であるという論理である。しかし嫦娥は日常から恩知らずで失礼な態度を羿にとっていたのであるから、目の前に毎日あった夫のものに手を出しても驚くには足らないのではないか。

また林非のいう「懸念」は、果たして読者に残るのだろうか。道士にもう一つ仙薬をもらうことに決めた羿の腑抜けた風情には、もはや嫦娥に再会して再び射かけるという大立ち回りを演じるような気概は見られない。「殺気」はやはり唐突で一過性のものに思われる。

李允経は羿が嫦娥を追いかけることについて、次のように述べている。

羿が本当に恐れたのは愛を失うことである、だから、彼は月に行って、彼の愛する者を追い求め続けることを決心したのだ。

しかし、羿と嫦娥の間には「愛」が存在したのだろうか。

本論は上記の疑問に一つの答えを見いだすために、「奔月」のテクストをまず読み直し、関連して、高長虹風刺とは別の魯迅の意図を提出してみることを目的とする。

１．　嫦娥

『奔月』を読み始めてすぐに感じることは、羿はなぜ嫦娥に献身的に仕えているのかということだ。まず、「奔月」第一節を中心に嫦娥の形象および羿と嫦娥の関係を読み直してみたい。

大した収獲なく帰る夫は、門を入る前からしょげ返っている。門を入った途端、窓に妻の姿を発見、収獲を見られてしまったと足がすくむ。

妻は帰った夫にこう告げる。

「また鴉のジャージャー麺、また鴉のジャージャー麺！聞きにいってごらん、

どこの家で一年中鴉肉ジャージャー麺を食べているというの。ほんとに何の因果か、こんなところへ嫁いできて、一年中鴉のジャージャー麺ばかり食べるなんて。」

この口上だけで「あまり高尚な性格ではない」[4] ことは明らかだ。肝っ玉女房ならばまだ納得がいくが、彼女は家でかいがいしく家事をしているのではなく、女中にかしづかれているので何もしなくてよい。

羿は、自分のプロフェッショナルな仕事について、嫦娥が「もう少し小さな鏃を使うわけにはいかないの。」と口出ししても気に懸けない。少し嫦娥の気がやわらいだと見れば機嫌をとり、嫦娥が微笑でも見せれば大喜びである。一方、男にとって女に不可欠の役割、すなわち自分の姿を「実物の二倍にして映し出す快い魔力を備えた鏡」[5] の役割を、嫦娥は演じない。物語終盤で、女中たちが、

「旦那様はやはり一人の戦士だという人もおります。」

「時には芸術家のように見えることさえございます。」

と、代わりに役割を果たしている。この不釣り合いな献身ぶりは、嫦娥がよほどの絶世の美女でなければ納得がいかない。しかし嫦娥の風貌は、「柳眉」はよいとして、「おしろいが少し禿げたため、目の淵がちょっと黄色くなり、まゆずみの色も両端が不ぞろいである。だが唇はあいかわらず火のように赤く、……頬にはまだえくぼがある。」これでは、せいぜい器量好しの田舎娘といったところだ。それにもかかわらず、羿はこのような嫦娥を見て、

「ああ、このような人に、年中カラスのジャージャー麺ばかり食わせているのだ」と恥じ入る。

どうやら、嫦娥は器量好しの上、羿よりも家が良いらしい。というのは、羿の思い出話からうかがえる。

「お前も覚えているだろう、御母上の門前によく黒熊が通ると、射てくれと何度も言いつかったものだ。」

羿は嫦娥の親の信頼が厚く、嫦娥を託されたものと分かる。

翌朝も、「大の字になって」嫦娥は寝ているのだが、羿はそっと起こさないように出かける。粗末な弁当を整えてくれるのも女中である。羿はしかも次のように女中に念をおす。

「奥様が目覚めて早い点心を召し上がられ、ご機嫌がよくなったころを見計らって、申し上げるのだ、夕食はどうぞすこしお待ち下さい、大変に申しわけ

ない、と。よいか、大変に申し訳ないと申し上げるのだぞ。」

総じて、嫦娥と羿には殆ど主人と使用人の図があてはまる。嫦娥は美しく生まれた家がよいが、家では何もしない女、羿は身分違いの美女を娶った男であるのだ。なお、嫦娥は無為に過ごしてはいるが、愚鈍ではない。

２．　羿

「奔月」の登場人物には女性が多い。使用人たちは男女ほぼ同数として、羿、嫦娥の親族には女性しか出てこない。羿は第三部で月とともに想起されるとおり、子どもの頃は祖母に可愛がられていた。また羿は姑つまり嫦娥の実母のお気に入りだった様子だ。どうやらこの世界は女系家族らしいと考えれば、嫦娥との力関係も納得がいく。

第一節の冒頭、貧弱な獲物を持ち帰った羿が、出迎えてくれた女中たちが皆「苦笑しているように」感じる部分がある。このような使用人に夫が軽んじられる様子は、嫦娥も感づいていたに違いない。

第二節は嫦娥からすれば、世間での夫の評判を裏付ける挿話である。

羿に間違って鶏を射られた老婆は、名を聞いても、

「夷羿……だれだい？私しゃ知らないよ」とつれない。「堯帝の時代、何匹も猪や蛇を射た」と説明されても「ハッハ、嘘つきが、それは逢蒙の旦那とその他の輩がしとめたんだよ」「近ごろよくそう言われていて、ひと月に四、五回も聞いたよ」とにべもない。羿の名声は世間でも失墜していることが分かる。さらに羿は老婆と饅頭十個と葱５本、芥子味噌と鶏とを代えることに話をつけ、嬉々として帰るのだからすでに恥も外聞もない。

ただ、このあと逢蒙が羿に矢をいかけたことが、かえって読者に羿が相変わらず優れた射手であることを証明し、噛鏃法という秘術を知る分逢蒙より一枚上手であることまで披露される。読者はこのとき漸く、羿が自分の力が発揮できないのは獲物がないからだ、という言葉を真に信用するにいたる。

とするとやはり、年の差があるらしいとはいえ [6)]、嫦娥は狩猟の名人という意味で、優れた夫を持っていることになる。

３．　羿の怒り

第三部で、羿が家に帰ると嫦娥を探して使用人が大騒ぎしている。その捜索の報告によって嫦娥について新たに分かることがある。一つは彼女が近所の

「姚家」へマージャンをしにいくのが常であったこと、それにはいつもお付きの者がついて行ったことである。いずれも嫦娥が何もしない「奥様」であったことをさらに裏付ける。また、羿が「嫦娥が怒って早まったことをしたのでは」と恐れて自殺できそうな場所を見に行かせることから、彼女の激しい気性が推測される。

しかし部屋に入って一瞬で謎がとける。嫦娥は仙薬を飲んで月へ行ってしまったのである。

部屋はあまりにも乱れている。嫦娥は先の寝姿からいって身だしなみが良くないであろうと推測されるにせよ、衣装箱は開け放し、宝石箱がなくなったことがすぐに分かるような乱れ具合で部屋を出ていっている。嫦娥は何を急いでいたのだろう。女中たちが言うには、嫦娥が見えなくなったのは「火をともすころ」、夕方である。

考えられる可能性の一つは、逢蒙との駆け落ちである。女中たちは常時嫦娥のそばにはべっていたのではない。それは嫦娥が所望した水を飲んだところも見届けておらず、いなくなった時間を特定できないことから分かる。嫦娥が一人の時間があったわけで、駆け落ちは可能であったろう。逢蒙は羿の言葉によれば「年若い」。逢蒙が羿を射殺すのに失敗したあと、羿が帰宅するよりほんの一足先に立ち寄って嫦娥を誘ったのだとすれば、彼女が部屋を慌てて出ていった様も理由がつく。さらに、仙薬だけでなく宝石箱ごとなくなっていることも説明がつく。この場合、宝丹はまだ飲まれていない可能性がある。

もっとも、この説は無論、根拠に乏しい。

では本論の冒頭に挙げた謎にとりかかろう。なぜ宝石箱がないのを見た羿は、すぐに月を見に外へ駆け出し、月に怒りの矢を射かけないのだろう。彼は、嫦娥が水を所望して、女中の一人が夕方黒い影が向こうへ飛ぶのを見た、と聞いて初めて外へ飛び出し、月を眺めているうちににわかに腹をたてるのである。この「間」は何だろうか。彼は嫦娥の出奔動機について、「鴉のジャージャー面は確かにやはりうまくない、彼女が我慢できなかったのも無理はない」と、食事の貧しさしか思いつかない。それほど嫦娥の内面には無関心であった。従って彼は宝石箱がないのを見てもまだ、嫦娥が自分を捨てたとは信じがたく、彼女が帰る可能性に賭けたかったのであり、彼女の出奔を否定しがたい事実が示されて初めて、殺気を爆発させたのではあるまいか。このとき、「ヒゲと髪はぼうぼうとなびき、黒い火のよう」と羿の容姿がはじめて男らしく形容され、

「太陽を射た日の雄姿を彷彿とさせ」る。

ここに別の謎がある。羿は昔日太陽を九つ射おとしたのだから、月に射かけた三本の矢は当然当たったはずである。現に月はぶるっと震え、見物人はみな落ちてくると思い声をあげる。しかしそれは「相変わらずゆったりと掛かり、穏やかにますます豊かな光を発し、少しも傷を受けていないようであった」。なぜだろうか。逢蒙との弓合戦の様子からすれば、羿の力が衰えていたとは言いがたい。月並みな対照ではあるが、太陽＝陽＝男、月＝陰＝女とすれば、太陽には通じた男の力の論理が、月には通じなかったというところであろうか。

月の射落としに失敗した羿は、「奥様は永遠に一人で楽しんでいるというわけだ。彼女はついに無慈悲にも私を捨てて一人で昇天してしまったのか。おそらく私が老けてきたと思ったんだろう。」と悄げていたわりには余りに早く立ち直る。「明日もういちどあの道士を探しに行って仙薬を一服所望し、飲んで追って昇っていこう。」仙人にすぐにもらえるようなものなら、なぜ早くもう一つもらって、うだつのあがらないこの世界から嫦娥と二人して飛び立たなかったのだろうか。矛盾している。

恐らくそれは、仙薬が女にはやれないものだったからであろう。第一節で羿は嫦娥にこう言っていた。

「私の方はどうということもない。例の道士がくれた金丹を飲めば、昇天できるのだから。だが、何はおき、お前のためをはからねばな…」

彼にとって自分が昇天するのは当たり前であり、その特権に嫦娥が手を出すという発想がなかった。だからそれを嫦娥が奪ったとき、思わぬ怒りを爆発させたのではないか。しかしそれは彼にとって、入手困難なものではあるが、二つと得られないものではなかったのだ。

４．ノラと嫦娥

「奔月」執筆の二年前、魯迅はイプセンの戯曲「人形の家」に触発された若い女性の家出ブームに際し「苦言」として [7]、講演「ノラは家を出てからどうなったか」（「娜拉走後怎様」、北京女子高等師範学校にて 1923 年 12 月 26 日、のちに『婦人雑誌』第 10 巻第 8 号、1924 年に掲載）を行っている。

> ノラは、家を出てからどうなったでしょうか？……理屈からいえば、ノラには実際、堕落か、家に戻ってくるか二つの道しかないでしょう。……

彼女は目覚めた心の他に何をもって行きましたか？……ずばり言って金がいるのです。

魯迅はこの講演で、実のところ女権問題は女性が経済力を獲得しても根本的には解決しない、と留保付きながらも、女性が家を出るには、まずは経済権の獲得が緊要である、と主張した。しかし当時世間では、知識人界でさえ「人形の家」の終盤のノラの家出にばかり注目が集まっており、「ノラのその後」への深慮をうながす魯迅の発言に対しては殆ど反響がなかった。

イプセンの「人形の家」では、妻ノラが家の経済権にまつわるトラブルを起こし、温厚な夫のように見えたヘルメルはそれを知ったとたん、自分の身の破滅を招いたと口汚く妻を罵る。「結婚してからずっと、掌中の玉のようにしてかわいがってきたお前のせいなんだぞ」[8)] と。しかしその場に届いた手紙で一瞬のうちにものわかりのよい夫に戻る。しかし夫と自分の関係の本質を見てしまったノラはその場で家を出ていく。ノラはかつて借金をして夫を立ち直らせた実行力があり、今回の家出につながる金銭トラブルでまた一段と成長している。

嫦娥の出奔を知った羿の態度は、ヘルメルの狼狽と怒り、爆発の後の静けさに重なるのではなかろうか。嫦娥は「目覚めた心」を持って出ていったかもしれないが、金銭ももっておらず、ノラのような経験もない。良家のお嬢さんである彼女には堕落する、すなわち妓女となる覚悟があるとも思われず、羿につれもどされ、無為の生活を送るほかはないのである。

羿にとって嫦娥は、世間体を保つに格好の妻であった。美貌で家柄のよいからそう簡単に「替え」は得られない、大事な、自分の「物」である。羿は嫦娥の衣食には細やかに気遣うが、彼女の内面には無頓着であった。このような生活の中、仙人から手にいれた仙薬は、かつての英雄としていつでも自分だけが月へ脱出できる、男だけの切り札だと羿は思いこんでおり、嫦娥がそれに手を出す知恵があるとは想像だにしなかった。しかし嫦娥は気性が激しく、目が早い女であり、浮気までした可能性もある。「利己的」ではあったが「凡庸」ではなかった。ともかく知恵をつけた嫦娥はその禁断の金丹を盗んで出奔したため、羿は異常なまでの怒りを爆発させた。しかし、それは彼にとっては、少し労力を注げばすぐにまた入手できるものだったのだ。

以上のように魯迅の「奔月」には、嫦娥が金丹を盗むまでの心理的なプロセスが欠落し、彼女が日々の晩飯の乏しさへ不満を抱いていたことに単純化・矮小化されてしまっている。それはノラが「家出」に至るまでの精神的なプロセスに全く頓着せず、家を出ればすべてよしとした 20 年代の「人形の家」ブームの風刺であった一面があるのではなかろうか。

注

1）　魯迅「奔月」は 1926 年 12 月 30 日脱稿、1927 年 1 月 25 日『莽原』半月刊第 2 巻第 2 期に発表された。
2）　代田智明 1994、林非 1996、周海波 1998 など。
3）　李允経 1992、皇甫積慶 2002 など。
4）　林非 p.233。
5）　「これまで何世紀もの間、女性たちは、男性の姿を実物の二倍にして映し出す快い魔力をそなえた鏡として役立ってきました」「鏡は、文明社会ではどんな風に役立っているにせよ、すべての荒々しい勇ましい行動には絶対必要なものです。……女性が男性にとってしばしば必要品であることは、これで幾分か説明がつきましょう」（ウルフ、pp.53-54）。このウルフの言葉は、いちいちあげないが歴代のフェミニストたちに引用され、展開されつつある。
6）　代田智明 p.68。
7）　清水賢一郎 1994 p.72。「人形の家」およびイプセンの中国における受容、それにおける魯迅の位置については同論文を参照されたい。
8）　「人形の家」訳はイプセン 1966、杉山誠訳による。

参考文献

ウルフ　1988　『自分だけの部屋』　川本静子訳　みすず書房
イプセン　1966　「人形の家」『世界文学全集 12　チェーホフ　イプセン』神西清・杉山誠訳　河出書房新社
皇甫積慶　2002　「『故事新編』――“油滑”与“復讐”」　馮光廉・劉増人・譚桂林主編『多維視野中的魯迅』山東教育出版社
清水賢一郎　1994　『明治日本および中華民国におけるイプセン受容』東京大学博士

論文
代田智明　1994　「『奔月』神話の終焉 ── 『故事新編』論ノート」、『飆風』20 号、飆風の会
周海波　1998　「英雄的無奈与無奈的英雄 ── 関於『奔月』与『鋳剣』的重新閲読」、『魯迅研究月刊』1998 年 12 号
李允経　1992　「愛情“危機”的再現 ── 読「奔月」」　『魯迅研究月刊』1992 年 6 号
林非　1996　「『奔月』和『鋳剣』 ── 与郭沫若、郁達夫歴史小説的比較」、林非『中国現代小説史上的魯迅』　陝西人民出版社